



ことがあった。球磨川上流の人吉から日向路へ出て、上代神話とゆかりの深い地方に身を置いたが、折から九月初めの荒天つづきで、心もとない宿屋に起き臥ししながらの詠歌は、すべて辛苦の程を示すものばかりであった。

二日、油津の港へつきて更に飢肥にいたる、枕流亭にやどる、

欄のもと僅かに芋をつくりたるあり心を惹く

ころふせば枕にひびく浅川に芋洗ふ子もが月白くうけり

この時の作歌の中には、「瓜むくと幼き時ゆせしがごと堅たさに割かば尚なうまからむ」などというのがある。「堅たさ」は、「堅さ横さ」という時の、用例稀な上代語だと思ふ。節の上代歌謡研究は、用語の上で時代を超越したと思ふえない程の自在さから来るリズム感に、特長を出すまで造詣深いものがあつた。その中でこのように上代語を大胆に打出している点に心惹かれるのである。

大胆に使用したというのではなくて、それが自然に出て来たといった方が正しかろう。特殊に恵まれた感覚の持ち主であつたと見ればそれまでだが、私は、上代語を歌の目として一種超時代の詠風が生まれ出たという言い方が、より自然であると考ええる。

掲げたこの歌の場合、「芋洗ふ子もが」の用語に表現形成上の核心を見たいと思ふのは早計であらうか。台風の目が無風状態であるように、この歌の目も無風の不動状態である。重みを持ち、どっしりと落ち着いた語感の上代語は、近代の使い手にとって、発想を表現にまで高めてゆく働きをしたのだと言ひ切つてよい。

「もが」という願望の終助詞の例として、三つ四つある中で、私は次の二首の歌を並べてみたくなるのだが、それぞれの歌境——というより詠嘆の動機というべきか——が、万葉に心酔していた長塚節の胸中に浮んできたのかもしれない。

都べに行かむ船もが刈薦の乱れて思ふ言告げやらむ (十五—三六四〇)

三栗の那賀に向へる曝井の絶えず通はむそこに妻もが (九—一七四五)

二首のうち、前者は九州の地から都をしのお現在の心境にぴったりであるが、後者に至っては、前者のイメージを透視した更に東の方の郷土に、伝説ぐるみに歌い込まれた世界があって、それが今まざまざと見えてきた、という想像が必ずしも荒唐無稽であるとは思えない。

事実、この曝井については多少の疑義も残されているし、節の歌との間のゆかりを直接的に考えることについては、抵抗を感じる向きも多かるう。しかしながら、それにも拘わらず敢えて強く引き寄せて考えなくなったのは、節の歌境に思いを馳せ、その上で、「もが」なる特殊用語に視点を置くようになったからであろうか。

宿屋のてすりの間近くに芋の葉が見えた。向うに流れる浅川の音が、折からの月の夜の薄明の中に聞えてくる。郷里の田園生活の中で見聞いたときのこと、如実に浮んできてもおかしくないどころか、きっとそういう情景下にあったことであろう。

以上のように考えるに至った由来については、私が長塚節歌集を読み、特に絶唱「鍼の如く」に傾倒した事情と、子規門の万葉研究に見られるひたぶるさが近代リアリズムと短歌的抒情性とをある程度止揚しとげたと思える功績と、二つのことに触れなくてはならない。

簡単に言えば、一人の近代歌人の生涯かけての行実があって、古典の生命力をその時点において生き返らせることができた、ということなのである。一人だけの功績ではなくて、背後にそのような情勢があった、という点から見ても、好箇の範例を示しているのである。<sup>注②</sup>

## 二

風土記においては言うまでもなく、万葉集においても、東歌と防人歌とを數十首持っている点で、常陸国の上代文学は豊かであったと言える。

代表に取り上げるべきは、筑波山のことであろう。それも、歌垣の民俗とのかかわりにおいて見てこそ、筑波の筑波らしさがよく分るというものであろう。歌枕として早くから有名になったけれども、自然の山岳として称えられた点と同等以上に、民謡の中の山として親しまれていたという点を、特長として認識しなければなるまい。

筑波嶺に雪かも降らる否をかも愛しき児ろが布乾さるかも（十四—三三五—）

「雪が降ったのか、いやそうじゃないのか、可愛いあの娘が布を乾しているのか、というまことに歌謡らしい歌謡である。一体これは雪を見て歌ったのか、布を見てか。諸注は二つに分かれているが、私は折口博士や私注とともに、いつも布を見てだと信じている。」（『万葉集東歌』と、田辺幸雄氏が言われたとおりであろうと私も思う。）

けれども、一歩さがって考えてみれば、二つのうちどれかにきめなくてはならないのであるうか、このまま素直に読んで、二つのどれでもない、つまり、実景などは問題でない、踊りながら合唱した歌だと見ればそれでもいいではないかとも考える。

自然と人間とが別々になる以前の、したがって、人間生活そのものの中に自然も山も取り込まれていた頃の、本当の歌謡文学として考えるならば、今見ているのは雪なのか布なのかなどと考えることは寧ろ大きな間違いであるとさえ言いたくなるのである。

右に引合いにした田辺氏の文章の前には、次のような言葉があるが、そこで言われている東歌の特質は、筑波嶺の歌にも当てはまるし、それも筑波の叙景にはでなくて、筑波で象徴される人間生活の、世にも美しい至境そのものへの評語なのではないか。

適切なことばで言いあらわしにくいが、ある特殊な明るさ、まぶしいような空気とでもいふべきものを持った歌をいくつか認め得る。たとえば、「青楊の萌らる川門に汝を待つと清水は汲まず立廻ならずも（三五四〇）」にあらわれて来る娘子の姿を想像する時、その姿が何とかがりのない明るさに輝いていることか。（傍線—山口）

人間生活という言葉でいうしかないが、悲しいことも楽しいことも、美しいことも醜いことも、全部ひっくりかえりての人間関係のことを、「かげりのない明るさ」と言っているのだと思う。

川端康成氏が、万葉集その他の遠い昔の詩歌に「文学の原型、または出発点」を見ると言われたとき、氏の眼に見

えていた上代歌謡の良さは、「自由に真実に自分を生きる」ことのできた、嘘いつわりがない明るさであったに相違ない。

久松潜一先生の言葉によるならば、「人間性と美とが一体となって、言語によって表現され、<sup>注⑤</sup>形象化されているのが万葉文学の性格」なのであり、それはまた、「清の美、明の美、直の美」ということもできよう。

高木市之助先生は、「日本文学の環境」の中で、「清」の一語をもつて言いつくすことができるという意味のことを言っておられるが、これは環境としての自然をどう見るかという観点からの発言なので、当然のことかもしれない。高木先生は、「山」と題する講義の中で、山なるものを単なる自然と見ないで、人間的考察をされた。記録に基づいて、一部分抄出してみよう。

此処にして家やもいづく白雲のたなびく山を越えてきにけり(三一―一八七)

「白雲のたなびく山を越えて」これは山に対する愛情ではない。好ましくないといふことを織り込んだ歌であります。……山は万葉人にとりまして呪はしい性格のものであると同時に、一方において非常に親しみのある、望ましきもの、可愛いもの、好ましいものであるのです。<sup>注④</sup>

愛憎感情の対象となるものとして山を見ることを、述べられたのだと思う。山そのものを自分たちの生活の中に取り入れればこそ、このような、「好ましくない」場合もあり、「非常に親しみのある」ものとなる場合もある。筑波山の場合は、まさしくその親しみのある「好ましいもの」として受け入れられていたのであった。

歌垣、嬬歌の筑波山は、まことに人間臭い山であった。高橋虫麻呂が、旅の愁を慰めようとして登ったのも、当時において既にそういう山として懐しまれていたのである。後に、筑波の道といえは連歌のこととなって、その名はしばしば用いられて今日に至っている。一座を組んで人間共同の製作にいそむ文学に、この人間臭い山の名が利用されたのも、理の当然であった。

古典愛の精神は、古典教育の基礎であるけれども、その成果によって益々醇化されてゆくものである。してみると、互いに因となり果となって助長し合うものと考えることができようであろう。

そうして、古典教育は、学校教育（社会教育）を含めての郷土教育の伝統と結びつくときに、効果があったといえるのではあるまいか。

今日の学校教育において、古典教育の効果について云々することは困難である。生徒たちへのアンケート調査だけでは、効果の判定はできない。面白くない古典学習であったという感想をもらす学生が、毎年圧倒的に多いし、それに類する調査も多少参考にしてみたけれども、そこに現われる数字だけでは判定できないし、教育的効果は意識しないところにあることを思えば、悲観するには当たらない。<sup>注6)</sup>

けれども、問題は教官と教材の側に伏在するのではないか。生徒の受講態度に逆作用されて情熱を失なった扱い方で、単なる口語訳や文法の説明だけで終わってしまうようなことでは、徒らに時間とエネルギーの消耗ではないか。一般の古典教材とその扱い方の現状について、私は疑義を抱かないわけにゆかないのである。

古典への窓を開き、古典に親しむ糸口をつかみたい。祖先のすぐれた創造的精神に触れることを目標とし、基本的古典の中から選ばれた価値ある話や表現を学びとらせたい。古人の心情把握の一助として、生活様式や思考様式について考えさせたい。郷土の古典には特に早くから親しみを持たせたい。そのための郷土文学読本をぜひ作ってほしい。民話などはいい補助教材になるので集録してほしい。

聞かされるだけでなく、生徒みずから興味をもって取り組むよう、指導者として新しい課題が与えられた今、広い立場で考えてみたいと思う。古典との対話—ここに目標を置いて、現代に生きる者の姿勢につき、真剣に考えてゆくつもり。

古典教材に関するアンケート調査の際、意見なり希望なりがあったら書いてほしい、という要請をしたのに対し、前者は中学、後者は高校の教師の意見である。

古典教材としては、広く考えること、長い歴史の流れに沿って伝わったものであること、そして、それを補助教材として集録し、「生徒みずから興味をもって取り組むよう」に郷土読本のようなものを必要とすること、などを新しい古典教育の課題として考えねばならないと痛感させられるのである。

常陸国の郷土文学として、茨城県でも風土記・万葉集から取材して編集したことがあった。新しい読本を編集することは、補助教材として役立つに違いないけれども、これをただ与えられるだけでは、正副二通りの古典読本を持たされることになる。これでは、教師にとっても、生徒によっても、自主的な古典享受が期待されようとは思えない。

長塚節という近代の郷土作家を通じて、古代の詩歌へ接近する。その調査検討について自主的な作業を模索してみる。副次的に、幾人かの先人が浮かび上がってくるに違いない。誇りとしてもいいような業績が、郷土出身者の上に紛うかたなき光栄を伴って評価されている。<sup>注6)</sup>

それを、自分たちの手で探索してみることになれば、郷土愛という抜き難い感情も働いて、案外成果をあげるのではなからうか。<sup>注7)</sup>

ただ、地域によっては古典とのかかわりの少ないところもあるので、そういう場合のことも考慮しなければならぬ。私の目にふれた郷土読本の中に、すばらしいのがある。それを見ると、そういうものが作れそうもない地方のことを考えなければならぬ。

私は、郷土を県単位に考えることを反省したいと思う。広い日本も、世界的に見ればわが郷土であるが、実際の意識を考え、世のしきたりなどを勘案するとき、郷土意識はもっと狭くて、狭ければ、狭いほど濃厚であることに気づかされる。そこで、大きく分けている考え方、関東とか東北とか、北九州とか南九州とか、いうふうには、広からず狭からず、風土・言語等の上で親近関係にある地域を考えるならば、無理なくゆくのではあるまいか。古典研究と古典教育とを有機的に繋ぎとめるために、広域郷土意識の可能性を、今後の課題として考えてみたいのである。

注(1) 西崎亨氏「演習形式による古典学習と創造的開発」(「解釈」昭47・8月号)は、「郷土文芸資料の指導をとおして」という副題のついた実践記録である。奈良県立山辺高校における郷土文学をゼミの形式で取扱ったやり方は、誠に暗示にも充ち、また手ごたえのある指導であったことを痛感した。

(2) 「長塚節研究会」の会員を多数出している筑波山麓の一角は、文人墨客が輩出している。「常総文学」の発行元もその一角にあって、近刊の第五号は「節・夜雨とその周辺」を特集しているが、郷土文芸の沃野というにふさわしい土地柄を思わせるものがある。

(3) 『万葉集入門——人間と風土——』

(4) 美夫君志会編『万葉集叢説』所収の「山」

(5) 「大学生の教養講座」(広島大学教育学部「国語教育研究」11)「茨城県私立高校国語教育研究会共同研究」昭和四十年年度報告)、茨大教養部調査その他による。

(6) 「仙覚抄」をはじめ、徳川光圀の業績などもあるが、特に現役の高校長、宇野悦郎氏の『常陸万葉風土記』は、多年にわたる教師生活の合間に調査されたもので、防人歌の研究は、知る人ぞ知る、貴重な労作である。

(7) 注1の西崎氏の報告の中に次のような言葉がある。参考に供したい。

「本演習形式の授業の中に於て、生徒は、教師中心の形式の授業に於ては見られない様な、調査方法に対する工夫、発表資料としてのプリント作成にあたっての工夫、効果的な発表方法の工夫と、古典というものに対して積極的に興味を示し、終始熱心に取り組んでくれた。演習を反省して、種々の問題のあったことも事実である。例えば、①教材選択に関する問題点、②時間数に関する問題点、③班の構成に関する問題点などがあげられる。」

○(付記)

上代文学会昭和四十七年度大会(五月二十七日、於茨城大学)の講演の原稿に加筆して本稿を成した。